防衛大学校本科第３２期学生及び理工学研究科第２５期学生卒業式における学校長式辞（昭和６３年３月２１日）

第5代学校長　夏目　晴雄

防衛大学校本科第３２期及び理工学研究科第２５期の学生諸君は、本日をもって所定の全課程を終了し、４年ないし２年の小原台生活に別れを告げることになりました。ここに卒業式を挙行する当たり、卒業生諸君全員に対し、まず心からお祝いを申し上げます。

本日、この栄えある式典に国務御多端の折にもかかわらず御臨席を賜りました竹下内閣総理大臣[注(1)]、瓦防衛庁長官[注(2)]をはじめ、国会議員の諸先生ほか、内外多数の来賓各位に対し、心から厚く御礼申し上げます。

また、卒業に至るまでの間、歴代の防衛関係機関の幹部各位、官民の諸機関、並びに在日米軍、各国大使館付武官等の方々からいただきました御指導、御協力に対しましても、併せて厚くお札を申し上げる次第であります。また、本大学校において学術教育の任に当たられました教授、助教授、講師、助手の各教官、日夜を分かたずひたむきに訓練、補導に全力を傾注され、あるいはまた縁の下の力持ちとなって各般の校務に精励せられた訓練指導教官及び職員各位に対しましても、学校長として深甚なる感謝と敬意を表するものであります。

更にはまた、遠路をも顧みず御参列賜りました御父兄の皆様方に対しましても、今日までの御援助に探く感謝申し上げますとともに、御子弟の成業を心からお祝いをするものであります。

４１０名の本科卒業生の諸君、顧れば昭和５９年の春４月、諸君は、希望と不安との交錯する中、緊張感に胸を震わせながら、ここ小原台の校門をくぐられたことと思います。

注(1)　竹下　登

注(2)　瓦　　力（つとむ）

それからの４年間、厳しい団体生活の中で学業に励み、訓練その他幾多のハードルを越え、試練に耐え、一回りも二回りも大きく、逞しく成長いたしました。今や、胸を張つて堂々と卒業して行く資格は諸君のものであります。

シンガポール共和国２名、タイ王国４名の留学生諸君に対しても、心からなる祝福を贈るものであります。

さて、諸君の人間修業も学問の研鑽も、すべて、これからが本番であります。諸君が、ここ小原台で学んだことは、あくまでも基礎的なものに過ぎず、防衛の専門家として具備すべき広汎な識能を吸収し得る資質を備えたというに過ぎません。

本日の卒業は、文字どおり「コメンスメント」、すなわち自衛官としての第一歩を踏み出すことを意味するものであります。諸君は、これから陸・海・空の各幹部候補生学校の課程を経たあと、それぞれ現役の幹部自衛官として、防衛の第一線に展開して行くわけでありますが、幹部自衛官の道は決して平坦なものではなく、その舞台は、名声と拍手とは、おおよそ無縁のものと言わねばなりません。言うまでもなく、名声や拍手を得ることと、大切な仕事に従事することは、全く別個のことであります。文字どおり、その任はあくまで重く、その道は遥かに遠いのであります。先般、在日米軍司令官の職を去られたテイシエ空軍中将は、私の最も尊敬する友人の一人でありますが、同中将は諸君に対する講話の中で、次のように述べております。

> 我々が、軍人の道を選んだということは、平和と自由を守ることに生涯を賭けたということである。献身には、犠牲がつきものである。家族との離別、十分とは言えない給料、頻繁な転勤、不規則な勤務時間、そしで事に臨んでは祖国のためには身命をなげうつという究極の犠牲を求められるものである。一言で言うらば、軍人の本分は、平和と自由のため、全てを国家に捧げることにある。

どんな職業であれ、何らかの犠牲は必要でありましよう。しかし究極の犠牲、すなわち身命を投げ打つことまでを要求されることは、軍人以外にはありません。己の名利、栄達、金銭的な利害の如きは二の次とする自衛官の本分も、この米国軍人の本質的特性と何等異なるところはないのであります。

私は、自らの意志と決断で、その生涯を祖国防衛の任に捧げようと決意された諸君に対し、心からの賞讃と敬意を表わすとともに、この道が諸君にとって悔いのない人生となることを信じて疑いません。また、私

は、かねがね「優れた幹部自衛官」であるためには、まず「真の紳士」でなければならないと説いてまいりました。このことは、自衛官としての透徹した使命観を自覚し、専門分野での知識・技能を修得すべきはもちろん、社会人としての健全な常識と幅広い教養、そして豊かな人間性をも持ち合わせなければならないことを意味します。米国ワシントン市にあるアーリントン記念館のドームには、これと軌(わだち)を一にする次のような一文が刻まれております。

When we assumed the Soldier, we did not lay aside the Citizen.

「我々は軍人になった。しかし、市民であることをやめたのではない」というような意味であります。これは、ジョージ・ワシントンが独立戦争の際、議会から軍司令官に任命する旨の通知を受けたことに対し、自己の所信を述べた返書の一節であります。我々は、軍人になった以上、軍人としての職分に最善を尽すが、軍人になったからといって、市民としての生活態度、市民としての良識を失ってはならない。立派な軍人であると同時に、良き市民でなければならないということであります。すなわち「我々は、自衛隊員である。しかし、市民であることをやめたのではない」という意味に置き換えることが出来ましょう。人間として、正しいものの考え方、謙虚な心構えを持つことは、将来幹部自衛官になるべき諸君の終生忘るべからざる教訓であると考えるのであります。

諸君は、小原台での４年間、数多くの貴重な体験を重ねてまいりました。また、伸展性のある資質をも身につけた筈であります。自信を持ち、まっすぐ前を見据えて、幹部自衛官としての道を邁進して貰いたいと思います。

次に、理工学研究科６０名の卒業生諸君に対し、一言、申し述べます。諸君は、幹部自衛官として必要な資質の涵養、就中(なかんずく)、各分野における大学院レベルの専門的知識技能を修得すべく、２年の歳月を本校において過ごされ、貴重な研究体験を積まれたのであります。思えば、あと十数年、世界は、次の世紀を迎えますが、この２１世紀初頭における自衛隊の幹部たるべき諸君に求められる最大のニーズは、高度の科学技術力であります。諸君が、この小原台において、大学時代の基礎の上に、それぞれの専攻を通じて頭脳の充電を図り、将来の飛躍と大成のポテンシャルを培う機会を得たことは、真に有意義であり、２年の第一線勤務の空白を補って余りあるものと信ずるのであります。

今後、諸君は、それぞれ新たな任務に挺身せられるのでありますが、更に研鑽に努められ、ますます重要となりつつある自衛隊の科学技術分

野の発展向上に尽力されるよう切望してやみません。

小原台生活の幕は、いま、正に閉じようとしております。これから先、同期生同士、その融和と団結を更に強め、いかなる部署、そしていかなる境涯にあっても、防大出身者としての誇りをもって、お互いに手を取り合い、助け合いつつ、祖国日本の輝やかしい将来のために、それぞれ挺身して行かれんことを、お別れに当たり、心から祈念してやみません。重ねて諸君の健康と健闘を祈りつつ、ここに、式辞を終わるものであります。